

よになつておん出された兄貴のあの時のあの顔あの憎みしの言葉をお忘れず
に
弟よ、忘れてはならない、兵營云云ふ集團内に於てごんなにか彼等の××が動いてゐるか云云ふことを
其處には巧妙な××による彼等の××××があるばかりだ
こんなこと今更俺が云はなくとも既に立派な同志としてしつかり三歩みを續けて来たお前だ
じゃ弟よ、其の荒い思つがいを忘れずに勇敢に飛込んで行けよ
そしてその檻の中に蠢めいてゐるお前と同じ幾多の寄合の者を大根切るような快さで××つて来いよ
いま餘儀なく兵營に××××まれお前に對する俺達の深い深い心底からの願ひなんだ
一九二九・八・九
島田登司

崖の上の人間よ

島田登司

るのか
婆に未練がなくつたのか
着物も帯も何もかも皆置いて裸體で行くと言ふのか
裸體で生れて来たと言ふのか
男ではない、女ではない、人間でもないと言ふのか
地に別れて何處へ行く
地に別れて何處へ行く
汝の行く路に俺は何も立つてゐるようにはしない、決して
俺は汝をよく知つてゐる、汝が何んであるかを
汝が何時も歌つた光雲の歌をも俺はその歌に合せて土風風の歌を唄つたではないか
汝が死ぬことを聞いて俺は今日もこの笛を吹く
死の歌を唄つてやる
生を歌を唄つてやる
美しく狂へる崖の上の人間よ

プロの途上感

高木孫次郎

「危いッ!!」
「馬鹿ッ!!」
「バツミはこりやアツ掛けて
驅けり抜けた高級車
バツカアド!

瞬間!!
血走つた
我が眼の底に焼き付いた影

クツシヨンに揺られ
悠然と
紫の煙を巻いて……
シガーを呷へた
モノクルの紳士?

思慕

羽尾鳥子

初夏の夜を水色に匂ふ月は優しい君の姿

夢よりも白い死の生へ
誰にさよならと言ふ
何にさよならと言ふ
汝が唇の紅き微笑みに谷底の河鹿までが啼く
山の聲を今一度聞いて行けよ
山の聲を
死 死……
死は一人にのみ興へられた幸福な世界である
生 生
女 女
閨の谷底に
河鹿が啼く
河鹿が啼く
俺は誰へ歌ふ
草笛に……
土風風の歌を……
汝が死の生 人の詩に合せて……
あ、汝が黒髪の流れよ
素裸體の狂へる詩人よ
行け! 海原へ
開放の船出に

或る人に

齋藤代志緒

淡い宵闇を流る、川は私の心が
夜毎君の姿を胸にうつせせ
唯々波ももとなりて千々にみだれるのみ
握手するにはあまりにも遠い、君の
へだたり
秋の夜
茂木さく

……秋です
蒼白い月夜です

微風に
コスモスが
たわむれてる少女のやうに揺られて居ます。
そよ風に揺られて居る花園は
澄みさほるやうな秋虫の聲で一つばい
です。
……秋です
蒼白い月夜です

歌

雄辯大會

原島清

九月一日采女小學校に開かれし雄辯大會を傍聴して
雄辯だ、雄辯を抜かすな
ブル共の手先に躍る
悲劇役者奴!
反動の手先にすぎぬさま等が大衆に呼びかけるなぞ、たはげを言ふな
愛國だ、農村振興だ、寢言言ふ
さま等自身を批判してか、れ
反動の傀儡が悲鳴を上げて演壇で
國難打開を夢みてゐるのか

労働者の唄へる

齋藤代志緒

○金があれば馬鹿げな顔をしてゐても
金さなけりああの餓鬼なんだ
○自由まで拘束されて働かなければならないわけはないミ力んでみたのだつたけれ
お前は何故泣く
泣くな強く生きろ
たこへ此の世の凡ての者が
嘲笑し反對し壓迫しても
それが爲戀人にそむかれても
お前は自己の信する
主義の爲に強く生きよ
あらゆるものにぶつされても
お前は決して死んではいけない
のたばつて血を吐いても
お、親しき友よ
屹度雄々しく起き上れ
そして叫べ
お前の信する正義を!!
(一九二九・九)

馬鈴薯

美津山晃

てめい等は馬鈴薯で澤山だ云つた政務官もあつたつて

きさま等の
雄辯などは職みにじり
俺達は進む俺達の世界へ
きさま等の愛國論など
おれ達の
××精神を燃やすのみだぞ
反動の手先に躍るきさま等に
見ろ!
臨官が拍手してゐる
失業者の歌
渡邊静七郎
焦燥の病の床に豫期してゐた解雇し
せの來し暴風雨の朝
たつた今轉げ落ちゆく黒い首のゆ
くへを想ふ吾れかな
冷へ切つた壁の上に擴がりゆく血潮の
いたく目にぞしむ込む
やるせなき頭をなぐり今更に階級意識
に目覺めたるか我は

愁想

遠山麗子

あ、誰にこの寂しさを語らばむ、玻璃窓に雨のそ、ぐたぐれ
つく、石にもいふいふはほしき、
きまも一つの石にかあらむ
落ちて行く、つたの紅葉が瀧みづか、
ゆるるもしらぬわが戀のみち
川に添ふ縁も今は黄ばむらむ、す、る
が如き秋の想ひて

眞夏の桑原にて

小野里雅秋

「困つたなあ」百姓はお太陽様をにら

仕事なきないは思へ職を求めて紹介
所前に立ちし吾れかな
半年も喰ふや喰はずにさがせごも働く
所なき今日の日も
心地良き與奮奮吾が生命けずりし社
長の死し聞く朝
心の断面
檜 槍 一
○結局ほんたうに食へなくなつてから
でなけりや新しいおれ達の生活がは
じまらないんだ
○憐れな自分を感しながらも叩きつづ
せないほき疲れてゐるんだおれのこ
ろは
○おれ達の働か方が悪いのか考へて
みるころ暗い日
○自分の思ひ一切を粉微塵に投げつけ
て見たい氣持。こんなころを誰に
訴へる
○青ざめた十二三の少年がつまらなそ
うに地下鐵に乗つてた。ここにも
文化の生んだ悲愴がある

有権者に

野村榮一

めながら汗をふき、桑をつんでる
作物は枯れて雷の鳴つてゐるを百姓は
さん氣持で聴いてゐるのか
○自働車がほこりをつけて通つて行くこ
ん畜生ミ叫ぶ馬方
×
ベタル曲りサドルははなれ鳴らぬリン
自轉車は名許りおれの自轉車
十圓の金が欲しいか正義なる政治が良
いか考へて見ろ
亡き父
吉田さり子
二月前まづしき床に臥してゐた父は永
久に歸らぬ人か
永さうに目覺めぬ父のおもかけは呪咀
に燃えてさびしくも見えし
細々さゆらぐ香けに又しても新たな涙
おさへがたしも
(四、七二)

前號發賣禁止

上毛大衆

十一月號

第二卷第九號 一部 金十錢

昭和四年十一月十日發行（毎月一回發行）

3304
292
(2-4)

JYOMO TAISHU



雨にたゝかれた安燈 骨程お前は細い

潘 美六

雨にたゝかれた安燈骨程細いお前がシ
ヨンボリ門口に立つた
恰度四年振りに
赫々たる華やかな錦を飾るかわりに
お前は、さうく
蚊の脛程に瘦せ衰へて飯つて来た
父は今
左肺は既に廢業してしまひ
綺麗な縁の黒髪だつたそれが
鬘毒に枯らされ禿た山程になつた髪ミ
ダツソリ落さした類の
お前に云わう
父は、お前がやつと拾七になつた許り

五拾圓の前借であの紡績工場へ追ひや
つてしまつたのだ、
それもその時父はたつた五俵の小作米
ミ三月積つた
納税に
臘味噌の焼けつく程に
考へ込んだ擧句
頭髪をハイカラに分ち
ネクタイをつけた
工場の勤務員にお前を連れさしてしま
つたのだ
父は其の後さうやらさうやらさびしく
一人で
露命をつないだもの、
お前は、さうく
都會の工場は
若い綺麗な娘を煮て
一諸くたに搾る濾過機の様なものだ
お前が一番最初に版省した時
お前は、この
林檎の様に可愛い頬を
グツッ落して来た
二度目にこの美しかった髪を

秋が来たけれど

松村文 一路

桐の葉が散つて虫が啼いてーそして
秋が来た、秋になれば、早く秋が来
ればと思つたのは夏のうちだつた、照
ひ通り秋は来たけれど私の生活には何
の變化も来なかつた、朝八時遠冷めし
た下宿の飯を一人で喰つて形の如く警
察に行く、で、死んだ生きた盗んだ無
銭飲食したやれ人妻が駈落ちしたの役
場は役場納税がさうの織物組合では
景氣が良いの悪いの織がさうのミ書な
ぐり學校や諸官署の備ごなき掻集め
十一時半の汽車にその原稿を積んで畫
飯さなる、午後同じ路を形の如く廻
つて電話で記事を送つて寝るさなるの
である、これが新聞記者としての私の
日科である。

上簇終了の夕

鈴木 つるの

使ひ乍らさちんミ片付いた部屋には
紫花やコスモスも飾られて
漸く上簇終へた夕への食卓に
父も妹も
粗末な料理に舌鼓を打つてる
誰の顔も
さすがに疲れて見ゆるが
ホツミした安堵に
みなぎる空氣は和やかだ。

ああ、働くもののみが知るこの喜悅！
十日餘りも降り續いた雨や
物凄く暴風雨
それにも増した恐ろしい
すき蟲に荒らされた桑園の被害
敷へ上げれば限りもない
思へば、何んミ烈しい閉てあつたこ
ミか
何んミ苦しい努力であつたこミか

小さな争ひだが……

遠山 麗子

「工場の汽笛がなつた！
六時だ！
町の灯は秋の雰圍氣の中に微かな呼吸
を續ける。
疲れた五體を引きずりながら歸り行く
さびしくも雄々しい彼女の姿……
さー彼女が一瞥をくれてすれちがつた
盛装の女！
「ア、お高く止まつてるよ……」
彼女はキーツミ振かへつた。
彼女ミ視線がピツタリかち合ふミ、
一種のプライドを見せ置は空へ！
裾さばきの絹すれの音をあびて
見送る彼女の顔を一抹の寂寥がよこぎ
る。彼女ミ輕ろき昂奮に真赤な血の頬を
見せた！」

きよ坊の最後

須 満子

おきよ坊よ
お前はさうして逝くのか
だが死水だけはくれてやりたい
さ……おきよ坊よ我儘してくれ
工場ぢや
生きた空氣が吸えなかつた
年が年中、陽の目は理めねえ
だから、お前は病氣になつたんだ
病室なんか あらう管がない

い、下宿の二階のガラス戸を時々強く
ゆする風がこの夜も毎夜の様に、吹
く砂埃をまきあげ處さらはず叩きつが
るあの赤城風を連想させたらなく嫌
である、又ぢきあのガサ／＼した西風
つゞきの冬の日が来るのだから。

別嬪さんでも遊びに来ぬエかなアミ私
の下宿には四十男の獨身者が居て毎日
の様に飯を喰ひながらこの言葉連發
する、聞く者も毎日であるから時々可
笑くなつてふき出す、別嬪さんでも来
ぬか？、四十越した獨りの下宿住ひを
するこの男の寂しい氣持はその一言に
よつて譯る様な氣がする。私ミ同じ様
にこの男も何かしら漠然とした、い、
こ、こがある様な氣持をもつて毎日勤め
先に出かけるちがひなかつた、然しあ
てのない別嬪はいつになつてもこの男
を訪れぬ様にい、こももなか／＼來そ
うで來ず今年もこの下宿一つ年をこ
ららしい、その男も——又私も、

夕方、外から歸るミ私はかぎつて米向
きの二階のガラス戸をあけ空をみるの
が常である今日このごろであつた——
散り残つた桐の葉が一枚一枚にこり残さ
れ紺碧の空にゆれて居た『別嬪さん
でも來ぬかなアミ云ふ様な氣持いでつ
までも空に浮かんだ一枚の桐の葉をみ
て居るけれどいつになつても待つて居
ない、こもも來ず、來るあてのない別
嬪はやつて來る音はなかつた、それ
ばかりがこの間の降りつゞいた雨にそ
の一葉も散つてしまひ窓をあける元氣
さへ私から奪つてしまつた、

△ 乙な——こミを書いて毎月否や顔をみ
るたび「何か書け云ふ本誌の小林、吉
田兩氏に「今月こミ何か書かせて貰ひ
ますミ安受合ひをしながら一年近く虚
を云ひ通して來た私である、だがこれ
から離れるミモウ忘れてしまつて否や
忘れて居るわけでもないのである、俺
がくだらぬ事を書いたつて社會的影響
がされだけであらう、それより呑むこミ

薄暗い、こんなアタ小屋で
何が静養だッ
五ヶ位の牛乳で
何が養生だッ

お前は、いつも
喧嘩の中へこうた、きつてた
工場のみんが云つてるよ
きよ坊の病氣は千服の薬よりは
復讐の響が一番だつて。
工場の設備が不完全だから
背い顔した人が毎日激増してゐるんだ
矢張、きよ坊のやうに死に近づいて行
くんだ

お前は、いつも
喧嘩の中へこうた、きつてた
工場のみんが云つてるよ
きよ坊の病氣は千服の薬よりは
復讐の響が一番だつて。
工場の設備が不完全だから
背い顔した人が毎日激増してゐるんだ
矢張、きよ坊のやうに死に近づいて行
くんだ

あまりに乏しく、我馬は老ひ果ててけ
り
荷を賣りてかへる道々、慙しきもの數
ありてあぢけなき思ひせし……こも
あり
されき、のぞみすくなき、この日頃
母上と只二人、山に暮し
のぞみ少し、このひごろ
みのる おかだにおくる

彼は虚偽な虚飾を、に捨てた
彼は愛するゾイオリンもた、きつてた
彼は愚なる磁場を乗り越えて
堀立小屋から雄大な原ツバにさび出し
た
彼の心臓は精煉爐よりも赤く燃え
彼は農民と労働者の先端に起つた
彼は全く人間の呻き泣く聲に醒された
のだ。

おきよ坊よ、
今夜は集會だよ、
そして明日はデモなんだ
油くさい死水なんか慙しがらないでく
れ
お前の病氣から刺戟を受けて
女工達のデモ振りを
心持ちよく見てゐてくれ

小松のかれ枝をきり
おち葉かきあつめ、一束、二束と草繩
をかけて、ひねもす山に働ければ
朝ぎりひかぬまに町に出て、明日こそ
は良き値に賣らむ
港近くは良家下町は問屋たち並び、山
の手は色柄なれば、夕方にせむ
町にゆかば、みめ美しき人の多く見る
もの面白し
この山家あきしにあらぬき、わが棲屋

おきよ坊よ、
今夜は集會だよ、
そして明日はデモなんだ
油くさい死水なんか慙しがらないでく
れ
お前の病氣から刺戟を受けて
女工達のデモ振りを
心持ちよく見てゐてくれ

落 日
渡し 澄昌月
一、わたしのすきな秋草よ
もう秋の日は落か、り
光りはな、めになりました
おまへの影のながいこま
二、夕日の中の秋草よ
まあ何さいふ美しいさ
虫の啼くのも一しは細りて
秋も日毎に深み行く

新年一週年紀念號原稿募集
小説 原稿紙(四〇〇字詰)
二十枚以内
戯曲 同
詩、歌、隨筆
切 十二月十日限
宛名 本誌編輯部

である眠るこころである、決論をつけ
てついで一年あまりの嘘をついて来たの
である、催促する雨氏はおそらく筆不
精の奴だと思つて居るにちがいない、
毎日筆を採る商賣でありながら

如何な鐵面質の私もそう、嘘ばかり
云へなくなり、それに私を知る多くの
の人たちにもさかく無沙汰勝ちなつ
て居るので丁度い、この生活断片を讀
んでもらひ「野郎も生きて居るなと思
つてもらひたく書いたのがこの隨筆
である。(十月六日)

若き同志におくる
磯田 沙路
ふるさとの若い同志よ、敏みて階級
戦に強く進まう
反逆もしたくならうさこのくらしいつ
になつたらよくなるんだらう
百姓がいやだま都あこがれる少女よ親
は汗にぬれて
戦つて戦つて同志よ、俺達はこのみぢ
めさを破つてゆかう
俺達の部を守つて焦せらずに強く生き
よう若い同志よ

秋 日
遠山 麗子
寂しき日、淋しき日とぞ口さむ、我
が心ろねのいさほしきかな
如何なれば冷たき體若はして、我れの
心をチツト見つむる
自らのかたく友の心知る故に、去りけ
る君も恨まざりけり
しみ、み、み糸のまつれのさげぬごま、
人の心のさげぬをかなしむ
何がなし大聲あげて呼びいたし、われ
も我が身のやるかたもなし

須 満 子
資本家の犬にはなるな労働者、うず巻
く社會の自己を見出せ
汗！汗！汗！こんなに汗が流れて、
俺の身體はやせこけて行く



歌

あゆる暴壓に
抗して戦ふ俺達だ
發禁だけを恐れるものか
發禁に抗して
俺達の運動が阻止できりや
太陽が西から上るさいふものだ
血を血で書く
俺達の上毛大衆を
×旗の下に死守するぞ
發禁に抗して
死守する俺達の上毛大衆を
×××で築め上げろ！
大衆の×××が凝集した
相統がこの拾遺月號だ
氣絶するなよ
何もかも俺達から奪はうとする
彼奴等に叩きつける×××！
それは上毛大衆だ

俺の心
齋藤代志緒
貧乏が嫌だ云つて逃げ去つた、友の
ワイフの馬鹿に呆れた
右の手に百万圓の金を持ち、左にシエ
ンの妻を抱きたい
金がないもうそれだけで澤山だ、その
先聞けば氣が狂ひだす
二十八頁よりつづく

私ばかりを振つて、運ばれたビー
ルを機織前にのみ乍らも、うな垂れて
了みました。考へてみるに、あのおく
みさか云ふ娘は藤澤君をおひき寄せ
爲にあの素的な手紙を書いたのでは
ないか

そして切手を貼る三三錢損だから鼻の
下の長い相手に不足税をさらせるやう
に仕くんだんです。喧嘩には自信のあ
る私だからよかつたもの、本物の藤
澤君だつたら不具にされるか半殺しに
されたであらませう。幸か不幸か私が
邪魔してしまひました。あ、可憐な
企劃したる貞操擁護ブル息子懲戒事件
をベチヤンコにしたのみならず、彼女
の父親に脊負投げの一手を食はせてし
ました。
「お兄さん、さうして、そんなにぶさ
ぎ込んでゐるの？」
「俺ア女が好きだもんで……」
「さう、それで？」
「だもんだから、出しや張らなくも
いいさけえ出しや張らんだ。これも助
平だから……」
「まア、女が好きで助平で……頼もし
いわねえ」
「何く？」
「しな垂れ掛つて来た女をいきなり平
手で蹴りつけるさ、私は外へ飛び出し
ました。もう道は水つてゐました。月
が登つて、清冽な光を投げてゐます。
赤城山が紫の輪廓をくつきり見せて
ゐました。(完)

「艶書事件」の続き

女給・女車掌

或男の話

S · K ·

一晩の寒さで水が氷になったり、僅か二三分の加熱で水が水蒸気になったりする様な現象は、自然科学の世界ばかりで、我々人間の社會生活では、一年経つて月給が五圓上り、二年経つて子供が生まれ、三年経つて女房が鼻につき、同じやうな事を所謂十年一日の如く繰り返へし繰り返へしやつて行くより外はないものゝあらためて早合點するのは大間違ひだ。少くも一晩のうちに濱口内閣が田中内閣に代る位な事は平氣な世の中だ。だから俺が、田舎中學で生意氣盛んな鬼鬼共、A點B點の最短距離は直線A Bなりなんて馬鹿げた理屈を鹿爪らしく教へて居たこの俺が二年許りて先生なんて言はれるのがいやになつて、さういふよりも、もつ重大な動機から、學生時代に任職した古巢であるところの東京へ歸つて来て、まあその間の事は省くとして、今ちやかうして茶つ葉服を着て工場へ通ふ身になつたんだから、いや驚くには當らない。伊達や酔

それは、確かにそうあるべき必然的な原因が必然的にぶつかりあつたに相違ありません。
あの頃を考へるに、まるで夢見たいで、しかし決して夢ぢやないのです。わたしも變つたが、あなたも變りました。
あたしも随分苦しんだ。けれども、今ちや之で立派な労働する女なんです。
あたしが子供を生んだのを、あなた知つてゐる？、多分知らないでせう。
之もあなたは知らない事だけれども、あなたが、タラシのない女から、今のやうな事ばかりした女(自分で思つてゐるのです。笑つちやいけぬ。に)に生れ變るのには、あなたの力が大いにあつたてゝゐるのです。さういふのは、あんな風にお互にはつきりしてゐたやうで何もなくぼんやりと氣まづく別れてしまつてから、つうかうかす、わたしは父の分らない子を腹に宿してしまつたのです。その頃さういふつら、まつたく、わたしは、何が何だか世の中が眞暗になつてしまつて、自殺なんて事を、生れて初めて眞剣に考へちやつたんです。
その時！實にその時です。あなたが別れる時に「お前に之がしつかり飲めるやうになつたら偉いんだが、恐らくお前には一生そんな時はないだらう。つて、あたしにくれた本——コロンタイ女史の「赤い戀」です。あれを

狂ぢやない。俺にこつちや眞剣勝負なんだ。おまけに俺はそれでなかなか大切な仕事を持つてゐるんだ。がまあそれはそれとして、實は、俺は最近實に嬉しい事を経験したんだ。ストライキで勝つのも大いに嬉しいが、之はまた之で別な意味で大いに喜ぶべき事なんて、まだ此の無産階級解放運動の経験に比較的に浅い俺としては頗笑ましい事の一つなんだ。さうかく、此の手紙を讀んで見えてくれ。何？、女の手紙だつて？、馬鹿にするないつて？、まあそう言はずに讀んでくれ。
女の手紙
恐ろしくだしねけで、實に驚いちゃいました。けれども決して偶然でも奇蹟でもありませんわね。吾々マルキシストは、斷じて偶然や奇蹟や、そんな坊主臭い事は信仰しません。だから、二人が、足掛け四年振りて、思ひがけない場所て、思ひがけない時に、ばつたり出逢つたさういつて、

讀んだ時に、生れて初めて、そうです、生れて初めて、この世の中が、私の眼の前で、ダリダ大きくもんどりを打ちました。同時に、眞暗な世の中が、すばらしく明るく、まつ白に輝き出しました。
わたしは、女給時代にたておいたお金で無事に子供を生んでしまふさ、ある手廻しの子供を里子に出してしまつて、體の恢復するのを待つて直ぐに今の職業に飛びこみました。
今では、あたしも之で一ぱし勇敢な闘士の一人です。
あたし達には、た、一つの意欲があるだけです。そして恐らくあなたも、昔のダラシのない戀人同志であつたあなたも、今では勇敢な「われわれの同志」にして手を握り、肩を組み合ふ事の出来るあなたである事を確信します。
あなたも急がぬ事だらうし、あたしも急い鉢だから思ふやうにはならぬかも知れませんが、封筒に書いた場所、二階を借りて一人で自炊してゐるから、訪ねて来て下さい。都合を知らせてくれれば、あたしの方から行つてもいい。ては又。握手。
同志 S · K ·
W 子

つて、實に久し振りに市街自動車に乗つたもんだ。ところが、たまげろぢやないか。そのバスの女車掌が俺が、田舎の町の中學教師をしてゐた時分に、その町のカフェエで馴染になつた女給さ、正に同じ人間なんだ。彼女が手紙で言ふ通り足掛け四年振りになるわけだが、一年許りも親しみ合つて、何も彼も許し合つた仲なんだから、いくら何だつて一目見れば分るつて譯さ。
さうかくたつた。俺は危ふく聲を立てるどころだつた。彼女もひきくびつた様だつた。何しろ、たゞさへ一べん分れた同志が四年も経つてから出逢へば随分びつくりするが、お互に何も彼も變つてゐるんだから、それに、そんな場合には、お互に、自分の變つてゐるのには大して氣も止まらずに、相手の變つてゐるのばかりが、ひきく大袈裟に感じられるものらしい。
併しこの事は、吾々の世界観からすれば、彼女がその手紙の冒頭で言つてゐる様に、決して偶然でもなければ、奇蹟でもないものである。お互の必然的な生活線が必然的に交錯したまのこのさなのだ。
二人は、街路を奔馳する市街自動車の中で、互に見張つた眼を見つめあつた。一口も言葉も發し得なかつた。さうかく他人が見れば、僕は一労働者であり、彼女は車掌であり、然も僕はお客様なのだ。それ以上何の縁もゆかりもない様に二人は見えた。それが、數年前の二人は、全く

同じ様に陳腐な軌道の上を、陳腐さは氣が附かずに滑つて行つたのだ。
恐ろしく世の中の殆んそ凡ての戀愛が、同じ事の繰返へしに退屈を感じて欠伸を催はし始めるさ、必ず懐古的になるか、或は巧利的に遠い將來の事を考へ始めて、現在の關係に嫌惡を感じ出して、之から遠ざかりたがるか、或は全く破棄したがる様になるものである。——多間に洩れず俺達の戀愛もその通りだつた。それに、それ許りではなしに、その頃次第に意識が階級的になつて來てゐた俺には、何の役に立たずに精力許り浪費してゐなければならぬ、あやふやな戀愛事なごを頭から否定する様になつて來たし、根本的な社會意識の上に次第々々に益々距たりを感じて來てゐた彼女を、好き戀愛の相手は考へられなくなり出した。かうなれば、凡てはおしまいだ。それに、ちよつと言ひ忘れたが、その頃の彼女は、女給なご、いふ(三言つて俺は概念的に頭から女給譚を否定し去るわけではないが)商賣に浮き身をやつしてゐた關係で、さうして矢張り浮き者だつた。若干で惚れてゐれば、それも戀愛至上的に惚れてゐれば、女の浮氣さいふ奴は、男にさつては、なかなか我慢の出来る代物ではない。
そこで俺は、斷然彼女の手を切る事に決めたんだ。そして、それ殆ん前前後して、俺は決定的に私生活上の大飛躍をした。つまり前にも話した様に、中學教師の生活に見

現在に異つた生活條件の中で、戀人同志として、自覺のない關係を續けた事があるのだ！
さうかくも僕は、突差の場合の頓智で！ポケットから紙片を鉛筆を取り出して、紙片に走り書て僕の住所氏名を書いて、自動車を乗り捨てる際に、切符と一緒に、彼女の掌の上に置いて來たのである。
そこで、その後三日経つてから、僕が彼女から受取つたのが、前に讀んで貰つた手紙なのだ。
彼女の簡便な手紙を見て、僕も初めて、一別以來の彼女の現在迄の生活線、臆げながら認識したわけなのである。
此處でちよつと四年前の俺の生活の恥さらしをすれば、前にもちよつと言つた通り、俺が田舎の町の中學の教師をしてゐる頃、彼女は同じ町でカフェエの女給をしてゐた。狭い田舎町の事で、少し許り眼に立つ美人で、幾らか才もきく女だつたので、忽ち彼女の存在は評判になつた。ふさしたきつてそのカフェエに通ひ始めた俺は、獨り者で下宿するの身であつた。直ぐに彼女と戀意になつてしまひ、やがて戀意を通り越して、底を割つた戀人同志の關係になつてしまつた。勿論、彼女を知る前に俺は童貞ではなかつたし、俺を知る前に彼女も處女ではなかつたが、そんな事は何の障害にもならなかつた。極めて自然に、二人の關係は、世の中の多くの若い戀人同志がそうである様に

切りをつけて、東京へ飛出したんだ。もうその頃には、俺の眼は、凡ての社會の事物を、階級的に見る様になつてゐた。彼女の短い戀愛——もつと時間短かつたが質的には随分堪能したものだと思つてゐる(惚氣ぢやないから笑つちやいけぬ)——に對して多少回顧的な感傷もないわけではなかつたが、社會運動に對する熱情の前には、そんなものは殆んさ價值がなかつた。
結局俺の東京を香縁にして、俺と彼女との生活線の間がりはぶつたり切れたのだ。何も彼もすつかり清算して、俺が彼女の處へ残したのは「赤い戀」の和譯本位のものだつた。
さうかく、全く思ひがけなかつた。俺が彼女に與へたその「赤い戀」一冊が、迷蒙な彼女に——社會のゴミみたいな彼女に、重大な覺醒を與へるすばらしい役目を果さうと、は、全く思ひがけなかつた。
彼女の手紙によれば、彼女は知らぬ父親の子供を生んでゐる。女給時代に、恐らく彼女が、何の定見もなく、俺以外の數多の男の玩弄物になつたらう。僅かな金で唇も許したらう。ちよつとした浮き心で、唇以上のものを許した事も、再三ではないであらう。
併し！過去をして過去のものたらしめよ！一切のものは流轉する。一切のものは飛躍する。
現在の彼女は、確固とした自覺の下に労働に従事する、

勇敢なプロレタリアートの味方だ。
此の事は、前に讀んでもらつた様な手紙を受取つて後、
俺が彼女の處を直接訪問する事によつて、彼女がその生活
を親しく語り合ふ事によつて實證的に示されたんだ。
俺は、全く四年振りに、親しく彼女と握手し合ひ、肩こ



艶書事件

素地文村

半農生活をしてゐる私は、其日未だ晝飯時には早かつた
けれども、常に朝から朝までたつたので気分もよく、従
つて仕事に馬力をかけたので、豫定の桑畑をうなひつづ
てしまつたので、エンガの土を丁寧に落し、空手瓶をさげ
て歸宅しました。

一體此國の農夫は働き過ぎます。その弊益々益して行
くのです。過勞、年毎に加はる不安に憔悴して、彼等
はいよく憂鬱に陥つて行くのは理の當然です。最近私は
『ローの「森間生活」』を讀みましたが、その中で著者は、
人間は一週間の中六日は好きな事をして遊んで、あこ一日

肩こをがっちり組み合つて抱擁した。昔の戀人同志として
ではなく、私とプロレタリアートの果敢な闘争の、花々し
い戦線の上に、同じ歩調で前進する若き二人の同志とし
て。(一九二九、九三〇)

を働けば立派に自給生活が出来るのである。ミワールデン
湖畔に於ける著者自身の實験に依つて證明してゐる程です
私は半日働きました。あこ半日は讀書したり、雑誌に耽つた
りするのが癖です。
其日野良から歸つて来るに、妹は私の姿を見るより早く
手を打つて叫びました。

「素的、素的! あんちゃん、ラヴ・レターだよ。鎮守の森
へ来て「君戀し」の唄を歌つて下さい。へッ、色男!
まだ十六のくせに、いやにませたおきやんな彼女には手
をやいてゐる私です。かついてゐるな!」思つて、黙つ

買へるんに!

私はキザミを詰め乍ら母に言ひました。
「ふんぞつてな。九八やんが、役、へ行つて訊いたけん
ぞ、藤澤生二言ふ人は居ねえちゆうし、藤澤先生の先の字
抜かしんだんべつて云ふから受取つたんだに。ふんぞに
英連々やしい!」

「配達屋なんか責任をのがれる爲に、こんな事でも言つて
押しつけろやア」
「宮郷の函から出たんだちゆうし……」
「ふんぞだんべかかな?」

成程私は父の亡くなる一年前まで、宮郷村で代用教員を
してゐたことがありました。で生徒から、二錢切手を貼つ
た封書や、表まで文句の書かれたハカキな紙を時々貰つて
よく手摺つたものでした。だから此の妙な手紙を留守中に
母が受取つた三云つてもあながち無理もありません。

其日の午後、讀書するでもなく机の前にごろ寝をべ
つた私は、自然考へが手紙の事に落ちて行くのでありまし
た。
彼女を執拗に追ひ掛け廻してゐる男があつて、毎夜の様
に彼女の家のあたりをうろつき廻り、所謂ハアモニカで「君
戀し」の唄を吹いたりして、牝鹿を慕ふ牡鹿のやうに森に
烟に、癒されぬ戀にもだえてゐるに相違ありません。彼女は
愛のこひの云ふより、その男のしつこさが不氣味だつ

たのでせう。彼は手紙を書くやうになりました。それには
「茂呂村 藤澤生二」署名して出したのです。(それでも何
の効もありませんでした。もう万策のつきた藤澤君は、絶
望して諦めたのであります。)

「乙女心は妙なもので、自分に言ひ寄つて来る者を拒み
つづけることに不思議な誇りや快感を覚ゆるものです。こ
ころがその男がバツタリ足をつき、何だか張り合ひ掛け
けて、果は心淋しくなるものです。

淫蕩的な月が蒼白く空中に引つ掛かつてゐる夏の夜、農
村の若い男女が、狂狂しく相手を求めて羽搏きます。過
勞、營養不良に瘦せ細つたバツタリたいな彼等は、自棄
的に飛びはねて、一晩幾人娘を××けたなご法螺を吹き
ます。それが秋口になつて、豊年祭りの頃になると、皆相
當の相手を得て結婚に進むのであります。

又、人知れず孕んだ娘はそれと相手に訴へ、男はひげの
伸びた顔を憔悴させて善後策に頭をしぼるものもあります。
だから秋は嫉妬まじりの話題が賑はしい季節なのです。だ
が、吹く風は寒さを含み、木々の葉も霜枯れて、早や赤城
嶺に雪の噂が立つ頃の晩秋から冬へかけて、バツタリロ
マンチックな色彩は缺けて、田園は再び死の様な沈黙と飢
餓とが暗く凍てつくばかりです。

「驅の調子もぐつと落ちて、食へる物もおしく、蠶葉
臭かつた脚もすつきり實つて、彼女は元氣だつた。そして

い程纏て、土を破つて萌え山た水々しい隠花植物みたいな
ものであります。私は段々彼女に興味を持つて来る
自分に氣附きました。會つてみたい氣持が強く私を動かす
のでした。牧歌的なエロチック・シーンに魅力を覺えたの
でせうか? しかし會つて其娘をさうしやう云ふ心算はな
かつたのです。さうだ、神々しい程無智な彼女に一寸
ていから會つて、理由を話してさつき引き上げて來や
う。遂に私はさう決心しました。噫、この氣まぐれから私
は後で救はれない自己嫌惡に陥るのです。

しばらく放つたらかしてをいたハモニカをやうやく神棚
の上に見つけ、水を掛けて埃を落す調子をしらべてをき
ました。
十五日の當夜、私は鳥打帽を被つて、麻裏草履をひつ掛
けて家を出ました。町を越えるに宮郷村です。

杉の木が少しある其鎮守には、神主が居るわけではなく
春秋二回の祭日のぞく外は雨の日に子守女の遊び場まじ
り。拜殿は雀の糞で白く汚れてハモニカを吹き鳴らしてゐた
でせうか、その時足音が聞えたのです。私は疑ひを思ふこ
らしました。心臓の動悸が高まります。黒い影が近寄つて
來ました。が、見るに人違ひでした。綿入れぬ、を着た
黒い顔の男なのです。私が道をよけるに、彼はいきなり私
のむなぐらを捉へるではありませんか!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

淋しかった。男がこひしかつた。振つた藤澤君がこひしか
つた。そしてあの手紙を書いた……と思ひます。
一方本物の藤澤君を物色してゐるに、自家の三軒置いて
隣りに同姓のブルジョアがあります。其處の息子で、中學
を出ても専門學校へ這入る程の學力もなく、趣味に生きる
三稱してハモニカで流行ぶしを吹いたりマンドリンを近所
迷惑に掻き鳴らしてゐる女蕩しの青年であります。彼に相
違ありません。此村で藤澤を名乗る家はまことに少いので
すから。さう決つて、開封した物を見て以來、私一家
の者に對して抱く彼の羞恥や怨恨を考へるに易や手渡すこ
ともありません。

畑路なごで猥褻な行爲にある者があつても、やつちよるな
ご微笑んで大目に見逃すのが村の兄弟の氣象です。そんな
男でしたら此の戸まきひした手紙も無神経にボンミ手渡す
ことも出来やうし、相手も心安く受取るてあります。受取つ
た相手のバツの悪さを想ふに渡せないのです。

此の次に出す時には切手を貼りますから今度はかかんべん
して下さい、と書いたり、藤澤生の生字を名前だと思ひ
こんだりしてゐる彼女は乾度貧しい家の娘で、教育も尋卒
そこそこなものであります。色白な彼女は、無智云々は
人間はなれのした程無智で、例へば、草深い田舎のみに見
受ける、貞操觀念の全々ない、それである、危ぶなかつか

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

「何てがんですね?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
嗚呼、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜい!

昭和四年十二月十六日印刷 昭和四年十二月十八日發行 毎月一回發行

第二卷第十號 一部金十錢

十二月號



週一週年紀念號

上毛大衆

JYOMO.TAISHU

上毛大衆 昭和四年十二月十六日

方角の第三日曜の休日を丸潰しにして激しい労働で疲

れた身體に鞭打つて、忘れて了つた字を思ひ出し乍らやつ

女工になつた妹からの手紙

大野 金治



(1)

ブルジョアのな月並な前置はやめます。かう云ふ一兄さんは、

『おや！ 貴様何時からそんな言葉を使ふやうになつたんだ？』

『不審に思ふでせう。ですがその不審の色は此の手紙を讀んで行くに連れてだん／＼微笑に變り、しまひには

『それでこそ俺の妹だ！』

『喜んで叫ぶに相違ありません。その有様がかうして遠く離れてゐても眼に見えるやうです。併しそれに引替へて『兄ばかりだと思つたら妹まで社會主義者になるなんて、由緒ある先祖に申譯がない！』

『さ、こんな事を云つて、父や母が兄さんを困らせるに違ひない事も想像されます。けれど此の手紙をよくわかるやうに讀んで聞かせたら、さつ／＼父や母でも私達が正しい事をしてゐるのださ少しは考へてくれると思ひます。さうな

れば折角の第三日曜の休日を丸潰しにして激しい労働で疲れた身體に鞭打つて、忘れて了つた字を思ひ出し乍らやつつ。此の長い手紙を書いた私の努力も幾分むくいられるさうなものです。

改めて書くまでもなく、私が村を出て遠い此の町へ来て糸挽屋の寄宿舎に女工生活をするやうになつたのは、今年の正月からです。

父や母が『由緒ある先祖の手前血を吐くやうな思ひで待つてゐた儘かばかりの田畑も去年の秋期限が切れて皆な借金のかたに取上げられた上にまだ利息が残り、『由緒ある祖先を持つ家』が小作人さまで落ちぶれてしまつて、親子四人が百姓をして見た處が、残つた利息のその利息さへ稼ぎ出せない事がわかつたからでした。

今思ひ出せば、馬鹿々々しい話ですが、此の工場へ来るまでは、私達が何うして貧乏するのとも知らずに、『由緒ある先祖を持つ家の名譽』のために父や母と一緒に

度々兄さんに警察から眼を付けられる様な危ない事からは身を退くやうにさる願ひしたものでした。去年の秋、長い拘留から歸つて来た時などは親娘三人が泣いて運動をやめるやうにこ謀めたのを今でも覚えてゐます。あの時なご、親や妹に涙をこぼさして物を言はせて置き乍ら唾のやうに歌つてゐる兄さん何んなに頑固な親不孝者と思つた事だせう。父や母は恐らく今でもさう思つてゐる事だせうが、その當時は私も警察へ引ッ張つて行かれるやうな事をするのは、例令何んな事でも社會のために悪い事ださ考へてゐたのです。だから、こんな不逞な親不孝な兄の許に大切な親を残して遠く此の町へ来る事を非常に悲しく心許なく思つたのです。何てまア、私はブルジョア的な孝行娘だつたのでせう。

それから又村を去る日、停車場まで送つてくれた兄さんが、道々村の友達にあつて、

『何處へ行んだ、お揃ひでー』

『何アに妹は今年から町の工場へ締挽に行くんでね、今送つて行く處さ』

なご、少しも遠慮なく、ズバ／＼云ふのを聞いてゐるに何だか、急に落ちぶれた自分に引け目を感じて、脇の下に冷汗をかいたものでした。

『村の人達には誰にもあはずにコツソリ行つてしまひた

りやア醫者は上がつたりだ。尤も健康保険醫云ふ奴は別だがね』

『さ、萬事が此の調子です。だから皆ながお書休みなごには、熊さんの處へ行つてお喋りをお願いします。

夏になるさよ／＼ある事、此の間沖編から來てゐる小母さんが食當りから下痢を起して寄宿舎に寝てましたが、何しろ便所は工場まで行かなければならぬので大變な騒ぎでした。私達は見兼ねて熊さんの處へ相談に行つたものです。

『さ、熊さんは云ひました。

『こんな事は俺の處へ相談に來る事はあるめえ、奥主人のゐる處の事』にはあんなに便所に近い好い座敷が空いてゐるぢやあねえか。あそこへ置いて貰つたらいよ』

成程と思つて晝休みに恐る／＼主人の處へ交渉に行つたのですが、私達はしほれたら怒つたりして歸つて來ました。主人が承知したけれどお喋りして變に綺麗好きなお神さんが出て來て、何だ彼ださ云つて、まるで肥桶でも擔ぎ込まれるやうに思つて承知しないんです。熊さんがそれを聞いて、

『よし俺がひき受けた。あんな廣い家へ夫婦三子供三三人きりて任てるやがつて、人を馬鹿にしてゐるやが、女工なんて人間ぢやあ無えと思つてゐるやがさー』、あいつらは――俺達のお陰で贅澤してやがつてさー』。その晩久しぶり

い』

みんなにさう思つたか知れませんが、併しこんな考へは此方へ來てから間もなく、工場の煙突から出る眞つ黒な煙さ一しよに何處かへ吹ッ飛んで行つて、今の私の胸には唯機關にくらべられた石炭のやうに赤く燃え上る團志があるだけだ。兄さんの喜びさうな言葉でせう！。

(2)

手紙なき書き付けのないものですからもう疲れて來ました。だから、女工生活が何んなにみぢめて苦しいものだからなごは、來月の第一日曜に又ゆつくり書きて、何うして私の心が機關にくべられた石炭のやうに赤く燃え上るやうになつたかを書きます。

火夫に清さん云ふ人がいます。最近雇はれたのですが丸い顔が髭だらけで眼が小さく團體が大きく重さうなので皆んなが『熊さん』と呼んでゐます。かなり無駄口をさく人ですが、併しその無駄口の中には、何かしら私達が日頃薄ぼんやりと感じてゐる生活上の不平や不満なごがズバリ／＼と軍の物の物を出すやうな正確さで現れてゐます。

例へば誰か、

『芳ちゃんの病氣つたら却々癒らないわね』云へば、熊さんが、

『さうよ、澤庵三馬の小便見たいな味噌汁だけ、病氣が癒

て此の町へ來た歌舞伎芝居さやらへ主人夫婦が子供を連れて見物に出掛けた留守をねらつて、熊さんが小母さんを寄宿舎から主人の家へ移してしまひました。寄宿舎の三十人の喜びはトキの聲の様です。かうしてしまへば流石のお神さんも何ごも云へません。

處がまア、嫌ぢやありませんか？ お神さん云つたらその晩子供が便所へ行かうとするさ、

『坊や、工女の使ふ便所へなんか汚ないから行くものぢやありません』

さ、病人に當て付けがましく云つて、一町も離れてゐる共同便所まで夜中に二度も駆けつて行くとつて――無論自分自身も共同便所まで用を足しに行き、旦那も行くやうにした。ゆるんでつてさ、それに就いて面白く話がありました。何しろ子供さ云つたら一寸も我慢が出来なくなるとまで遊びに紛れてゐるものだから、共同便所へ行くまで堪へ切れなくつて途中で歩きながら粗糞をしてしまふんです。まるで漫罵ぢやないの？

『まあ仕様がなないのね』

さ云つて、往來の真ん中に、行儀わるく垂れた子供のウシチを赤い顔して眺めてゐる情で返つた立派な奥様ぶりを想像して下さい。

うふ、さ、誰だつてふき出すでせう。全く小氣味がよくつてうふ、さ、です。共同便所の方が家の便所より綺麗

だと思つてゐる處なき滑稽ぢやないの。彼の人達の綺麗好きなんて大抵こんなものでせう。

熊さんは、面白おかしく冗談を云ひ／＼みんなの心を捕へて主人夫婦に對する反感へこひつぱつて行きました。

(3)

こんな事があつてから間もなく、世間は金解禁ミやらの問題で喧しくなりました。併し

此の問題は私達の生活ミは何の縁もない高級な政治上の事ミしか思はれないので——尤も金解禁ミ云ふことが根柢からわからないのにも依りますが——あまり心を惹付けられませんでした。唯、緊縮だ、節約だミ熱病や見たいに世間の人の騒ぐのに釣られて、わけもわからずに

「活動見に行かないの？」

「駄目々々緊縮ぢやないの？」

「五錢宛出し合つてお菓子買はないの？」

「喰ひしんぼ！節約を知らないの、五錢處かおかし／＼つて

てな調子。熊さんミ來たら又此の人らしく

「何が緊縮節約だい、俺達にこれ以上ツマしくやれミ云ふのは三度の飯を二度にしろ云ふのと同じだよ、金持をやせさせねえために俺達をやせらせかさうてえのが奴等の手なんだ!!」

ミこそ味噌にけなした上、

「金解禁ミえ怪物は俺も今友達ミ研究してゐるんだが、政府のやり方ぢや、何うも一番俺達が見せられさうだナア。何んでも賃銀は引下けられさうだし、仕事は縮められて失業者が殖えるらしいナア」

ミ色々な例を引いて政治ミ私達の生活ミが例令何んな小さい事でも直接關係のある事を教へ政治ミ云ふものを遠い所にある火事のやうに考へてゐる私達をニヤ／＼笑ひ乍ら馬鹿にするのです。併し馬鹿にされ乍らも私達は何時の間にか熊さんの話を好感をさへ持つて聞いているました。

今から途二三日前の或る朝です。始業にはまだ一時間も時間のある頃、私はいつになく小用を催して便所へ立ちました。さつきも書いた通り便所は工場にありました。秋ミは云へまだ九月の事なので、もう夜が明けてゐました。用を達して丁ふ少し早い寝て仕様がなないと思つて、早起の熊さんへ（此の人は火夫で早く起きます）の處へ行つて見ました。熊さんは、黒くなつたシャツミズボンだけでした。熊さんミ太い鐵の棒を右手に握つて、左手には一握みの小さい紙切を持って、それをよんでゐました。

「熊さんぢやなかつた清さんお早う、何、それは？」

「あ、房ちゃんか？ こんな早いのにもうみんな起きてるんかい？」

「うゝん、私だけ、何よ、それは？」

握らして、太い力のある手で私を工場の中へ引つぱつて行つたのです。

クマさんの顔に押されたやうな氣持で夢中で私はビラをまいりました。流石に手がふるへて、ビラがクマさんのやうに一枚々々手際よく握めなかつたのを覺えてゐます。みんなまいりしてしまつて工場の隅にほんやりしてゐるクマさんです。太い指で私の頬を笑ひ乍ら突つて云ふのです。

「房公しツかりしろよ、びく／＼しちや駄目だぞ！今夜俺ミしよに友達の家へ來いよ、お前の兄貴がしてゐる事や俺達にしてゐる事に就いてわかるやうに話してやるから——さ、早く寄宿舎へ行つて白ぼけてろ！」

そしてクマさんは、機關室へ歸つて、太い鐵の棒で眞ツ赤に燃えた石炭をガリ／＼掻き廻すミ、何時もの朝よりも威勢の好い起床汽笛をぼ／＼と鳴らしてしまふミ大きなアキビを一つして、さして、隅の腰掛にかけて居眠りの姿勢をしたのです。

(4)

およその事は、もうわかつたてせう。長くなりますからあこ三行でやめます。

氣の弱い工場主はあのビラで私達が可成り動搖してゐる事を恐れて未だに賃銀引下を言渡さずにゐます。だがキツトその中に一騒動ある事せう。

もう準備はなつて、私達は満を持してゐるのです。労働者の同盟軍ミしての農民の兄さんへ、クマさんから、勢揃いの握手、それを傳へる妹ミしての喜び乍ら（終）の堅い握手、それを傳へる妹ミしての喜び乍ら（終）

1929.11.23

『上毛大衆』昭和五年一月号掲載文芸欄

昭和五年二月十四日印刷 昭和五年二月十五日發行 第一號發行

第三卷第一號 一部 金十錢

一月號

プロレタリア文藝號

上毛大衆

JYOMO TAISHU

1309
498
(2-1)



説小 下 獄

渡良瀬 潤

其年も、もう秋の末で本部の前にある樺の木の葉はずつかり黄色く色づいてゐた。池田ミ山村ミは、火鉢に向ひ合つたまゝ、口もきかず、思ひ／＼に外の景色を見入つてゐた。いつもしんねりむつ／＼してゐて、口数もきかない山村は、戸外の景色も見飽きたミいふ様な振りで、おもむろに池田の方を振り向いて口を切つた。

「何んミか決まりそうなんだア」

「何んミかぢやない、上告棄却ミきまつてるよ」池田も向き直つて答へた。

「もう何時這入つてもいいさ、密柑も食つたし、活動も観たし……」山村は獨言の様に言つた。

池田は、密柑も食つたし、活動も観たしと言つた山村の

子供らしい言葉が、腹の中では可笑しかつたが、又これから入獄しなければならぬ山村の身の上を考へるミ、其言葉が却つて淋しい様にも思はれた。

池田ミ山村ミは、或る治安警察法違反事件に連座して、保釋で出て居るのであつた。事件は今大審院に廻つて居るので、其最後の判決を待つてゐるのであつた。併し、其最後の判決は、無論上告棄却の判決であつて、近いうちに入獄しなければならぬミ云ふミを二人共覺悟してゐた。様な氣持で、何んミなく落着けなかつた。

はじめ此の事件に連座した者は、十四人もあつたのであつたが、執行猶豫になつた者や、病氣で公判が延期になつて

るる者や、分離されて軍法會議の方へ廻つて、既に服役して居る者なきあつて、今度上告棄却にされれば、結局池田も、山村も、もう一人川田といふ同志三人だけが入るわけになつてゐた。刑は三人共、禁錮七月、未決拘留日數六十日通算といふ控訴院の判決になつてゐた。

三人はそれより入獄の準備をした。密かんの好きな山村は這入れば食へなくなるといふので、毎晩の様に密柑を買つて来ては食つた。又、他にこれいふ楽しみを持たない二人は、友誼を誘つて、よく活動親に出掛けた。それに池田が妻子まで引連れて、この農民組合縣聯合會本部へ住み込む様になつたのも、一つの入獄準備であつた。

池田の家は、其縣の北部にあつて、中流の農家だつたが池田が事件に引懸つて收監されるや、頑固で百姓氣質の池田の親父は、倅が刑事事件に引懸つた事を、甚だ面目ない事として非常に怒つた。そんな工合であつたから、惹いては、それが嫌である池田の妻の方へもあつたから、惹いては、金工面をして貰つて差入れをしたり、辯護士との交渉をしたり、今年生れたばかりの二番目の子を背負つて、同志の間や、其他あちこち飛び歩いた。池田が未決生活六ヶ月の間は、若し刑が決つて池田が入獄すれば、又其留守中面倒な家庭の中に在つて苦しまねばならない。其處で池

田の妻は、池田の入獄中だけは家に居たくないといふのであつた。池田も又、こうした家庭に妻子を残して置くことは氣が、だつたので、何んか良い方法は無いものか考へてゐた。其處へ恰度農民組合本部に居た吉田といふのが、他へ行く事になつたので、差し當り本部の留守居がなくなるわけになつた。其處で、それを幸に池田が引移るこゝになつたのである。そこへ又、獨身の山村が同居して、組合の事務を手傳ふこゝになつた。山村は池田より二ツ年下で、或る旅館の息子だが、彼が大學生の時、事件に引懸り、大學の方もやめになつてしまつたのである。山村は筋力少し悪るいので、入獄前に静養する筈だつたが、組合の方の仕事が多かつたので、なかく體を休める暇はなかつた。

けふは、久しぶりで池田と山村と二人が揃つて、のんびりした氣持ちで火鉢に向ひ合つて話すこゝが出来たのである。それから幾日か過ぎた或る晩であつた。池田親子と、山村が貧弱な夕飯をすましてから、火鉢に向つて世間話をしてゐる。池田の、大きい方の、尋常一年に通つてゐる子供が、一枚の書用紙に描いた繪を持つて来て、

『父うちやん、けふは學校で寫生をしてきたよ』といつて其繪を池田の膝の上へ置いた。見るに、其繪はクレヨンで

『僕なんか、こんなこへ這入らないよ』正ちやんが言つた。

『だつて大學つて言ふんだよ』

『そちやんやないよ、泥棒やなんか悪い事をした人が這入るんだつて、先生が言つたよ』

『だつて大學つて言ふんだよ』

『そちやんやないよ、泥棒やなんか悪い事をした人が這入るんだつて、先生が言つたよ』

『だつて大學つて言ふんだよ』

『そちやんやないよ、泥棒やなんか悪い事をした人が這入るんだつて、先生が言つたよ』

『だつて大學つて言ふんだよ』

『そちやんやないよ、泥棒やなんか悪い事をした人が這入るんだつて、先生が言つたよ』

『だつて大學つて言ふんだよ』

『そちやんやないよ、泥棒やなんか悪い事をした人が這入るんだつて、先生が言つたよ』

『だつて大學つて言ふんだよ』

それから、池田は妻と相談の上、只東京へ山村と二人で勉強に行くのだと云ふ事にした。そして、それから折にふれては、父ちやんは近いうちに山村さん、東京へ行つて、むづかしい學問を勉強して来るのだから、正ちやんはよく母あちやんの言ふ事を聞いてるんだよ、なご云つて聞かせた。池田の妻も又、父うちやんは東京へ行つて、むづかしい本を讀んでくるんだよ、云つてきかせた。

そのころして居るうちに、秋も暮れて、十二月へ這入つた。本部の櫻の木はすっかり葉が落ちてしまつた。其年は震災があつてから三年目、世間は非常に不景氣だつた。それで街には年末大賣出しの用意で、所々に立看板などが立ち始めた。山村は體温計をふくらしなしながら、本部に居て色々事務をまひるし、池田は、演説會だとか大會だとか方々へ出かけるので静養するこゝろはなかつた。名物のからつ風は日毎に強くなつて、庭の櫻の枝がヒューヒューと呻つた。

池田が下獄の日は遂に來た。十二月十七日の朝、まだうす暗いうちに池田は、いつも來る高等の迎へを受けた。其朝は山村も、川田も實家へ歸つてゐたので池田が一人だつた。

池田が高等に伴はれて警察へ行つてみるに、思ひ掛けなくも川田が居た。さうしたんだと聞くと、『昨晚あれに會ひ

獨房だつた。この一棟は全部一癖あるものばかりを入れて置く處で、亂暴をする者だとか、氣狂ひだとか、老人だとか、癪小便だとか、特殊のものばかりだつた。池田の左隣の窃盜前科三犯の男は、氣が變になる手當り次第に器物を叩きこわした。右隣の強盜罪で懲役十年といふ低能な老人は、前科何犯だ、云つて聞くと、指を折つて八九犯までは數へるが、あは忘れてしまつた云つてゐた。

間もなく、窃盜三犯君と交代りに年頃五十近くで前科二十三犯といふのが池田の隣へ來た。池田は話し上手なこの男から、彼れの活動寫眞の様に變種種まじりなく、數寄をきわめた一代記を聞くこゝろ面白くて退屈しのぎになつた。其年の冬は恐ろしく寒かつた。

寒さは日増しにつつた。間もなく監獄へも正月が來た。池田は僅か二た切れの餅に、樂しがるべき社會の正月のこゝろを憶んだ。そして暖くなるこゝろばかり待つてゐた。

二月もまだ寒かつた。三月になつた。監獄の庭の櫻が咲いて、窓の下はこゝろが芽を出した。なんまなく春の訪れてくる氣配が牢舎の中にも感じられた。

三月末の或る靜かな日の午後だつた。池田は話しにも、讀書にも飽きて、ぼんやり腹想にふけつてゐた。すると、塀の外を大勢の小學校の生徒らしいのが通るガヤ／＼といふ聲と足音とが耳に這入つた。池田は

に行こうと思つて家の方の驛から汽車に乗つたところ、この停車場に刑事が待つてゐる途中を下ろされちやつたんだ、そして昨晩は警察へ泊つたんだ、といふのであつた。

川田には兼ねて一人の女があつた。女は或町の大きい料理屋に勤めてゐる女中であつたが、フトした機會から川田と知る様になり、川田の社會運動者である處や、その爲に入獄する身である事なきに同情したのが、二人は遂に相思の仲になつた。そして刑の方がすんだら二人が一緒にゐる約束になつた。そこで川田は入獄の日も決まつたので彼女に別れを告ぐべくあひひに出かけたのであつた。

ところが、警察の方では、若しや女にひかされて逃走でもされては困ると思つて途中で下ろして留置したのであつた。

川田はあつて心ゆくばかり語り合はふとして、あひなかつた二人の心事を思つて可哀想になつた。それでもあきらめの良い川田は愚痴を言はなかつた。

それから池田と川田の二人は検事局へ行つた。検事局へ行つてみるに山村も來て居た。其處で三人が一緒にやつて愈刑務所へ行くこゝろになつた。検事局からは見送りに來てくれた、同志の大林、吉田、池田の妻なき多數にまもられて、固い握手を名残りに二年振り監獄の門をくぐつた。池田の入れられた監房は一棟が二十三房に仕切られてゐる

フト自分が入獄する前に、子供が描いて來た寫生畫のこゝろを思ひ出した。そして急に子供のこゝろが思はれた。こゝろに依つたらへいの外を通る生徒の中にも自分の子供も居るのぢやないかしら？

そして先生が『監獄といふのは……』なんて説明してゐるのぢやないかしら？

こんなこゝろを考へて、池田は急に、言へ知れない暗い氣持になつた。(終)

『僕なんか、こんなこへ這入らないよ』正ちやんが言つた。



小説

がんばる

大野 金治

1. 源 さ ん

頑張屋、陰謀屋、宣傳屋、これは階級運動の三拍子だ。云はれてゐる。何所の組合いても政黨にても、たゞ三拍子は揃はなくともその中の一拍子や二拍子はキツトあるものだ。

さて、A農民組合に源さんなる人がゐて、頑張屋で通つてゐる。もう直き三十になるだらう。なりこそ小さいが、臆つ玉の大きい落付いた男で、尤もよく見るミ少々必要以上で落付き過ぎてゐる動作があまり敏活でないのが玉にキズらしく思へる。まア暗から牛を牽出すほぎでもあるまいが、晝間運送牛を引いてゐるくらゐなマダマルコキを符合はしてゐるのだと思へば間違ひはない。だが、その理合せにて

2. がんばり甲斐があるぞー

こゝで紹介する源さんの話も一度聞いた人には退屈だらうが初めての人には面白だらう。て、一寸の間源さんの達者な口がが張つて貰ふさしやう。

兎に角、去年の霜害には俺アが張つたもんだ。おいおいさう笑ふねえ、何うも俺はかう切り出さねえちや話がかまく出来ねんだ。

何しろおらが村ミ来た日にや、此の附近で一審ひびくやられちやつて、村の桑畑で青い葉の付いてる所ミ云つたら半分位しかねえ。あゝは眞ッ黒けにやられちやつたんだから俺達小作人の心が霜を喰らつた桑の葉よりもつこしよ返つたのも無理もな話。だが、今時の小作人が「霜を喰らひました、へい」

「云つてたんぢや生きちやゆかれねえ。組合ぢや早速その晩會合をぶつたもんだ。その時分の組合ミ云つたらみんなも知つる通り小つぼげなもんで組合員ミ云つたら十人位のもんだつた。今てこそ四十人も組合員があるが、それは此の霜でが張つたお蔭なんだ。さてその晩の會合では、今年の小作人は半分にしやうミ云ふ事を申合せた。半分ミ云ふ一寸無理のやうにも聞こえるが、折角掃いた春蠶は半分も捨てなけりやなんねえ始末だからそれが當り前なんだ。それから組合に入らねえ小作人を出来るだけ引入れ

も云ふのか、喋る事は人並以上にがんばる。だから源さんが、
『あの時は俺アが張つたもんだ』
を初め、いくら暇な時でも大抵の同志が
『そら！ 源さんのがんばりが初まつたぞー』
ミ尻に帆をあげざるを得ないのだ。いゝ面をしてゐるやうも
のなら何度か聞かされた手柄話のムシ返して少くも三十
分位は損をして丁。源さんの話はいつても『俺アが張つ
たもんだ』が前置になつてゐるので馴れた同志は此の前置
を尻に帆をあげざるを得ないのだ。いゝ面をしてゐるやうも
にがんばる張屋の名のある所ならだうが、事實源さんは動作
こそ牛の如く鈍い所もあるが、がんばる段になるミ又牛の
如く口先だけてなくネバリ強く運動する。

と一緒に争論ぶつこ、そんなこゝは云ふだけア野暮ミ云ふもんだ。て、鷲が小さい中にミ云ふんで、その次の日から十人の組合員が小作人の狙ひ打ちを初めた。言ひわすれたが、此の村ミ来たら知つての通り、會の裏見てえな處で、古野で地主が縣會議員に出てゐる位だから、およその事はわかるだんべえ。かう云ふ俺なんても、恥づかしい話だが、二年程前までは、手前が何うして喰ふするのかも知らねえ。

『俺が家は祖父さまの代から、會だ！』
なんて威張つてゐたもんだ。今でもこんなこゝをぬかす奴が大分あるから情ねえもんさ。そんなわけで随分組合へ入れるに骨を折つたもんだが、暮しの苦しいつて奴は百年考へるよりも効能のある薬だミ見えて兎に角五十人ばかりましまつたね。お蔭のその中には今まで組合ミ云ふものを理解しねえて唯恐ろしがつてゐる縣會議員の古野の小作人が二十人もゐるんだから、がんばり甲斐があるもんだ。

そこで幹部一同腕にヨリをかけて、古野の言葉ぢやねえが、むやみに不逞ぶりを發揮してアチツたね。

3. 二匹の狐の會話

さて、これらが俺のがんばつた話なんだ。さうなるミ古野の奴ぢつしてゐられなくなつて。忘れもしねえ、俺が野良へ出べえと思つて、古野の邸の少し手前まで通りか

るミ丁度洋服で外出姿をした古野ミ、執持の禿頭の木村ミが門を出て来た處だつた。奴等は俺には気が付かねえて誰もねえと思つて普通の聲で何か話乍ら縣道を直市の方へ歩いて行くんだ。
『此奴等又噂な事を話してやすめえ、よし聞けるだけ聞いてやれ』
ミ思つて俺は二人の跡から一間ばかり離れてついて行つた。野良へ出る仕度をしてゐる足袋履なんだから足音がする氣遣ひなした。それに奴等は奴等て話に夢中になつてゐるんだから、全く何うも都合よく出来てゐるやうな。

二人の話は、まアさつこゝんな調子だ。
『家の小作人に限つて、奴等の煽動に乗るやうな者はよいと思つてゐたのが此方の油断だつた。一人や二人なら兎に角、二十人ミ云へば三分の二だ。それが今年の小作料五割減を要求するに至つては、恩も義理も知らぬ仕打だ！ 一體、木村、君にした處で、こんなに騒ぎが大きくなるまで權はんで置こミ云ふ法はないぢやないか？』
『いや、わしもその古野家の小作人に限つて、そんな馬鹿な事が思つてゐたのが、そもく千慮の一失でしてね、何ミも申辨のない次第なんだして』

『兎に角、僕は今日これから縣廳へ行つて、知事なり内務部長なり、早速村の桑畑を視察に来るやうに交渉するつもりだ』

4. 追 拂

ま、さつこゝんなわけさ。へ、へ、へ。お氣の毒乍ら奴等の陰謀をみんな聞いちゃまつたわけさ。さうなれば仕事は此方が半分勝つたも同じミ云ふもんだ、べらぼうめ！

その日のひる過ぎ、村の入口の縣道に面した菓子屋の店先で、色々な與太をあげ乍ら俺は夕暮までがんばつた。つまり見はりをしたつてわけさ。木村ツて云ふ古狐がM市から歸つて来るミ組合を荒しやがるからね。もう少し暗くなる頃、禿頭はやつて来たね。親狐にふるまつて貰つたんだと見えて、ふだんせえ赤い面をまるめて天狗の面の様にしたるやがつた。野郎を連り過して置いて、三間はかり後から俺が足音を忍ばせてついて行くも知らねえて野郎、自分の家の方へ歸らずに古野の小作人て組合員の澤山なる鳥山部落の方へ行くてねえか。

『こりやいよく、奥の手を出しに来やがつた』
ミ思つてゐるミ、案に違はず野郎め組合員の英さんの家のカイドを入りやがつた。

『こりや面白、面の皮ひんむいてくれべえ』
俺は突嗟にう思つて、野郎ミは反對に裏口から一足先へ英さんの家へ入つて、もうミつくから來てゐたやうな顔をして白ばくされてゐるミ、直ぐやつて来た。
『今晚は、英さんのたかね？』

『するミ、何んな事になるんぞ？』
『察しがわるいね、だから今度のやうな事になるんだ。キツてゐるてはな、知事や内務部長に何が出来る。唯連れて来て縣當局も同情に堪えない、何んか對策を講ずるから學村一致協力して調劑に苦難を切抜けるやうにミ云ふ事を宣傳させて、小作人を有難がらせるんだ』
『成程、そりや、考へて』
『て、君はM市で用を濟ましたら村へ歸つて早速うまく小作人に此の事を宣傳するんだ』
『そりやもう心得たもんで』

『それだけぢや駄目だ、まだある。今日は、會支部の幹部會がある。その席上多分から云ふこゝになると思ふね。つまり、今年の霜害は、損害莫大だから救済のために今月納期になつてゐる縣稅家屋稅ミ附加税を秋の納期まで延期することを縣に進言する事になる。その外にも新規低利資金の融通や前に貸した低利資金の返済延期などがあると思ふが、かう云ふのは小作人にはあまり關係がないから、税金を延期するミ云ふ事を觸れ廻らんだ。よく云つておくが、唯それだけを觸れ廻つたのぢや駄目だぜ、會では百姓のこゝを思つてかう云ふことをしてくるだから組合になさ入つて村の平和を亂さず開議をやつた方がいゝミ云ふ事に力を入れるんだ。わかつたらうね？』

『へえ、その邊の處はもうぬかりはございせんて』

『何か用かね』英さんが云ふ

『あゝ、たよ、まア上がつてくんな』
英さんにさう云はれて、のゝ上がつて來たが、ふミ俺の顔見てびくつしたやうだつたが、そこは圖々しいもんで、づかづか俺ミ英さんの圍んでゐる煙草盆の外へ來たね。

『何か用かね』英さんが云ふ
『いや別に用ミ云ふわけぢやねえが、一寸通りか、つたものだから、それはさうミ近頃村も大分騒がしくなつたやうだね？ 今度の霜はひさしいので無理もねえが、それにしても同じ村にゐるからにやお互に圓満にやらんミ兎角弱い者に損が行くやうになるもんで』
な、當てつけを云つたり、脅かしたりし初めやがつた。

『それだ。今日縣廳へ用があつて行つたんだが、何んでも二三日の中に知事や内務部長が霜害の視察に来るつて話だ。縣でも今度はよほさ同情してゐるらしいね』
『へえ、知事さんが視察に来るかね？』

何も知らねえ英さんがデツかい眼を一層デツかくしてかう云つたもんだ。するミ木村の禿頭め！ 英さんが充分話に引入れられたのを見て取るミ、得たりさばかりに一膝乗り出して何か云はうしやがつた。形勢不利ミ來やがつたね。さアかうなりやう黙つてゐられねえ。憚り乍ら此の源さんが頭張つてゐるんだ！ ミばかりに、いきなり云つてやつたよ。

5. 役場の庭事件

三日目の朝、古野は知事ご知事のお伴の役人ミを連れて、
縣廳の自動車で役場へ乗付けたんだが、彼は得意だつたね。
役場の前に胸に物ある俺達組合員四十人近く、そこに
俺達得意の宣傳をもつて集めた小作人が五十人ばかり狭い
庭にギョッリ詰まつて、此のお情深し知事閣下を隨喜の涙
を流して迎へるやうなふりをした。

知事一行は古野の案内で自動車を降りる。役場の中へ入
つて、休憩室にあてられた村長の室へ入つた。その室は立
廻の直ぐ右手にあつてガラス障子がハッキリとあるから
の様子がよくわかる。肥つてゐるの有名な知事が窮屈さう
に瘦せぎすの古野ミテールを隔て、腰掛けてゐる。まる
で豚が狼ミが向ひ合つてゐるやうだ。そして何か呑気さう
に視察の事なき忘れてゐるかのやうに笑ひ乍ら話をし
てゐる。學校の授業を休んだ若いキレイな女教員がウヤ
／＼しくお茶を捧げて持つて来る。村長も助役も何か一言
いはれる度に盛んに感縮してペコ／＼頭を下けてゐる格好
マルデ見てゐられぬ。

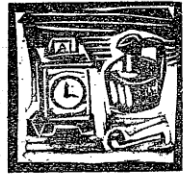
その中に俺の隣りにゐる組合の由さんが、にや／＼笑ひ
乍ら俺に云つた。
「源さん、もうよかんべー！」
俺もやり度くモズモズしてゐるのだから
も此の際大いに自重して輕舉變動を慎み一部不逞なる人々
の煽動に乗ぜられる事なく從來の如く村民一致して慎重に
事を計られん事を切望する次第であります」
こんな事を云ひやがつた。さア、今度はよく俺の出
る番だ！そこで俺はかねて用意して置いた石の上に集つ
て、

「諸君！」
ミやつた。古野の奴一日引込みさうにしたが、びつくり
して又立止まつた。庭の道中は嬉しさうに一齊に拍手した
んだ。
「私は一昨日、此の村から腹の黒い狐が二匹四馬市の方へ行
くのを見た。一匹はやせてゐて一匹は何でもひきく頭がは
げがないから静かに偉い人をよんで来て、ありもし
ない親切心を見せてやらなげに偉い人な。それから税金
を一期延ばしてやる。ミ、まあ大體こんな話でした。私達
は税金を延ばして貰ふ事を有難く思はぬわけでもないが、
それは百姓が困つてゐるのかわかつたら、偉い人をよん
で来て下さらなくとも、から、たミ半分にも負けて
貰ひたい。これが小作人の本當の腹の底だと思ふ。食ふ物
も食はずに圓満もヘチマもあつたものでねえと思ふが、み
んな何う思ふ？」

わつ！と喚聲がわいて、パチ／＼拍手が鳴つた。

「その通りだ。しつかりやれ！」
「源さん、頑張れ！」
俺の方が反対にアチられちやつて、あぶなくボツツミす
る處だつた。古野ミ来たたら呆氣に取られて、カ、シ見てえ
に突立つてゐるやがつた。そこで俺はふさふさの用意
して置いた縣稅家屋稅、附加稅負稅の陳情書を取り出して、
それを讀み上げた上、
「本日長官閣下が御來村下されたのは、願つてもない機會
だから、吾々の要求の至當なる御視察の上確めて頂き、
有力なる古野氏には長官に宜しく吾々の意のある處をお傳
へ願ふやうに御努力願ひ度いと思ふ。此の陳情書は古野氏
を通じて長官に御覽に入れ貰ひ度いと思ふ。」

「異議なく！」
「賛成！」
の聲が起つて又拍手が湧き上がった。そこで俺は漸く今
になつて俺達の企みを悟つて逃腹してマゴマゴしてゐる古
野の處へすかさず飛んで行つて陳情書を押付けたやうに握
らしたもんだ。するに古野のあわて返つた姿を追込むやう
に、
「小作人團結萬歳！」
を由さんが音頭取つてやつ付けたもんだ。こんな痛快な
ことつて、度々あるもんでねえ。



かけ落ちしたお葉

茂 呂 光 吉

義男は秋祭のぐる日の子供のやうに指折りかぞへて待つ
て居た。お祭の夜、秋祭の夜には村の鎮守様の庭に獅子
舞ひがある。村の若い娘たち、青年、親父、親母、年寄、子供た
ちまでが鎮守様の庭に參詣かだん、獅子舞ひを見に来る。
それは義男が産れない、ずつと前から獅子舞ひに夜を
更すのが村のたのしい年中行事の一つになつて居た。だが
義男が十五、六の頃だつたかに、費用が高むところから地
主等の反對に遇つて一年し、舞ひを休んだことがあつた。
その年は激しい早越で胡麻以外の作物はすべて凶作だつた
ばかりでなく、傳染病は村全體を襲つて二十三人の若者は
コロリ斃されてしまつたのだつた。そこで、舞連中は觀
面に鎮守様のお怒りに觸れたのだと云ひふらしたのでその
次年からは地主も弱音を吐いて、再び、獅子舞ひは村の秋の
夜を飾る古風な行事として戻つたのだつた。

村に祭りが近づいた頃は墓場の大銀杏の葉は黄色く色づ
き、葉をばら撒く寒風が樹の上でさうさう吹つて居た。そ

して毎日渡鳥の群が山から里の方を覗きして空を流れる雲
のやうに飛んだ。ツグミやモクドリの中は賑かな旅役者
のやうだつたし、ホウシロやキツ、キの道中は丁度人目を
しのぶ厭落者が、てなれば内縁の夫婦の睦しい渡り者の
やうにも考へられた。
くつきり晴れた碧色の空には刺戟の強い太陽が赤熱した
花のやうに輝いて小春日和ミ云ひたいほ細い静かな光線
をふり撒いてゐる。
義男は親父の佐兵衛に負けまいと黄色に熱れた陸稻を餘
念なく刈るのだったが、刈つた一握の陸稻を握りて腰をの
ばす度にお葉のおミがチラ／＼胸に浮びあがつた。
優しい愛らしい口元、空色に澄んだ瞳、微笑む濃艶な
ダリアの花が崩れるやうな十七のお葉の姿が義男にこつて
は忘れられない幻でもあつた。
そしてそれは彼の心から離さうとしても離れない執着
づよひ戀しい幽霊なのだ。彼の身も心も奪ひ去る戀の花で

「それで何だらう、縣でも同情に堪えない、何か對策を
講ずるから舉村一致協力して圓満に此の苦難を切抜けるや
うにミカラ宣傳させて小作人を有難がるんだ、ミ來な
すつたね。それからまだある。ミ會支部では今月納期に
なつてゐる縣稅家屋稅ミ附加稅を秋まで延期する事を縣に
進言する事になるだらう。だからお前は村へ歸つたら組合
になさ入らずミ會でこればミ小作人のためを思つてゐる
のだから此の際圓満にやるやうに宣傳しなければ駄目だぞ
ミ仰しやりましたね。俺はちやん今朝の話を聞いてゐた
んだ。そんなことつて今時の小作人がだまされ世話はねえ
ミ云ふもんだ。税金を延ばしてくれんことは負けること、
も取らねえ事ミ進んだんべ、木村さん？ それから
圓満にやつて貧乏人の得の行つたタメシがねえ、圓満ミ云
ふのはだから金持には都合い、奴さ！」
一息にかうやつ付けて英さんの家からはげ頭を追拂つて
やつた。英さんもたまげたが野郎もたまげたね。こんな痛
快なことつてあるもんでねえ。
その晩は勿論その次の日もばんも木村のはげ頭が外の組
合員の所へ行かぬやうに俺がついて歩いたんよ。ミの
真似つて樂なもんでなかつた。こんな事があるミは知らず
古野は町の第二號夫人の所へもミ下がつてゐたのだからそ
のばんも、その次のばんも歸らなかつた。

「よつし、ぢや、やろぞー！」
ミ云ふんでパチ／＼拍手をやるミみんなが續いてやつ
た。古野を釣出して一言喋べらしてトツチメテやうミ云
ふ策なんだ。若し出て來なかつたら此方で一席辯じ立て
る手筈になつてゐる。そこに、抜かりはねえ。するに案の
定、古野が立脚に現れた。
「おア面白え！」
俺達は思ふ盡しにハマツたので嬉しく又隣に拍手をし
た。するに古野が動違ひして自分のために拍手をしたのか
ミ思つて得意になつて初めた。
「え、一言皆様に御挨拶申上げます。今回の霜害につ
いては縣當局に於て非常に諸君に同情されまして、本日
長官閣下には御多用中にも拘らず懇々本村へ視察のため御
出張に相成りました。これから村内を巡視されるのであ
りますが道々眼についた桑畑を御覽になつた丈けでも強想
外に被害の甚大であるに深く心を痛められ、此の際村民
一同協力致して圓満に此の難局を打開するやうにミ私を通
じて村民へ傳へて貰ひ度いミ仰せられてゐます。何れ縣で
も何か善後策を講ずるてありませうが、更に我がミ會
支部でも一昨日幹事會を開きまして、應急對策を協議致し
ました結果今月納期になつてゐる縣稅家屋稅ミ附加稅を秋
まで一期延期致すことになり縣に此の旨進言して實行して
貰ふ事に決定しました。かう云ふ次第でありますから諸君

もあつたのだ。
だから彼はお葉のこゝみを通して近づいたお祭の夜が餘計に待遠しかつた。

祭の夜——きつと賑やかな人出だらう。多く集る人々の中から目立つて美しいお葉の姿を見つけたして杉森の暗がり誘つて、そのばんはきつと切ない自分の思ひを打ち明けて見る。その戦術……若し彼にはさうした陰謀が考へられずには居なかつた。

「義男！早くせよ！早くせよ！早く刈んねえささ、お祭までには刈り切れねえもんな」
さう云ふ親父の聲に義男は、はつと我に歸つて陸稻をつかみつ、搦つて刈つて擡げらるる陸稻は秋陽にバチバチ音して乾いた。

西に傾いた陽は彼等親父の影を細長く大地に描いてゐた。「義公よ！俺あ、早くしまつてくからな」
一畦がきりがつくさ佐兵衛は腰を叩きながら義男を振り向いて義男に云つた。

義男は一寸顔だけあけて「あ、」返事だけして、ちよりに「陸稻を刈つた。」
「社總代の會談だもゆがし、舞連中三棒使ひの喧嘩の手打ちだんべえや」

こしから取つた煙管にマッチを磨つた佐兵衛は氣嫌よさげに陸稻を刈る俵を見下して、義男が大きくなつて仕事か拂

の苦しい心打ち明けようさめて居たので村木の言葉は義男にさう云はせるに手度よかつた。

「おえふか？ おえふだつて矢つぱり駄目さあ、おえふだつて、夏ちゃんのやうに村の青年は好かねえからな」
義男は面喰つた。村木はおえふだけは離りしてさう云ふだらうさ考へて居たのに、すつかり裏切られてしまつた。

「おえふちゃん、何んて駄目なんだや」
彼はさう村木に聞かずに居られなかつた。

「何んてなつて、おえふの尻にもい、んがあるんだもからな」
「い、んさ一體そら誰だや」
義男はせき込んで云つた。

「何んさ、東京の大學生だちやう語だが、あんな厄ても面が少しい、べえて、大學生が惚るなんて女でなけり駄目だ」
村木は白あげにちえつと、睡をした。

義男は何も云ふ事は出来なかつた。大きな恥辱を感じたとして一時に血が頭の方へ逆上してくるのを感じた。夕陽を浴びた鴉が柿山の方に啼くのが黄昏の静かな空気を破つて聞える。

「お祭の夜にはしつかりやるべえぜ、なあ、女なんか捨場に困るはさる世の中だわ、何も悲観する事はねえ」
村木は嫌いて笑つた。義男はそれが癪だつた。

おえふはもう駄目なんだ、他人のものなんだ。だけ一言胸の苦しみ、悶えを明さずに別れなければならぬのは義男には物足らないやうにも思つた。

村木が歸つた後でも義男はおえふのこゝみ、村木が云つたこゝみ針を射すやうに感じられた。だが、さうであつても胸に浮ぶのは或る夏のばんの事だつた。沼べりに夕涼に出た時、おえふは義男の居る所へ来ていろ／＼の話をした。彼にはその夜の彼女の手の温みを忘れる事は出来なかつたとして「正しい人であつて下さい。さうすれば……」と微笑に思はせ振つたおえふの微笑がうかんで来た。村木が何んさ云はうさ他人を憐れおえふぢやないかと思つた。

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

する血潮を押へるやうに胸に手を押し當たり、樹の間の月光に薄い星を見つめたりした。獅子舞の笛と太鼓が苦しさに振へる心臓に恐ろしく、悲しく、楽しく波打つやうだ。丁度女を待ち詫びる義男の胸に。

お葉は本當にこの杉森の中の丘に来てくれるさ書いて寄越したのに、或ひは偽つたのかも知れないさ憶息もしたりとお葉の姿が五分三秒ないうちにこの丘に現れるやうにも思へた。

戀する者は馬鹿だ！こんな苦しみを七日も續けた日には人間は必ず死ぬかも知れないさ彼はいく度も繰返し、繰り返して頭を抱へて、その草群に倒れるやう突伏してゐた。その時、草群を分けて、落葉を踏んで來る人の氣配がした。

義男はお葉ぢやないかと思つて立上つて見た。それは月光に正しくお葉だつた。
お葉は小足に走つて近づいてくる。

義男は氣まつたのでお葉に背を向けて立つてゐた。しばらく経つてお葉は義男の肩に軽く手をかけてゐた。「義男さん!! あの用つて何!!……そんなに黙つて居なかつたつてい、ぢやないの」

義男は黙つて口を開かなかつた。「何か云つて下さい」

「私、ずつと前からお葉ちゃんを戀してきたくてすけれど、お葉ちゃんを私を愛してくれる氣持ちはないか、それを聞きたいんです。」

彼女は黙つて居た。月光を浴びた臙人形のやうなお葉の美しい頬だつた。

「義男さん、私たちはそんな話らないお話はやめにいたしませう。私たちプロレタリアには戀なんつて問題ぢやないでせう。ただ地主と資本家と如何に闘ひ、如何にして彼等に勝利を得るか云ふ事こそが問題なんですものねえ」

彼女は健けにもさう云ひ切つて義男の手を取つて、熱い接吻をした。

「何をするんだ、剛畜生!!」義男は云ひ様、彼女の手を振り拂つた。

彼女、あつげにさらされて義男の顔を見た。義男は泣いてたのだつた。涙が月に光つて居た。男なんてものは、そんな位で泣くぢやないさ云はうさ思つたが、彼女は階級意識に見えない義男の姿を見るさ氣の毒で一言も云へなかつた。

祭の夜が明ける頃、村には二つの事件が起つた、それは

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞

お祭の夜が来た。
義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭をもれてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかこゝ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものださ彼は心でつぶやいて、亂舞